

第2問

次の文章は、夏目漱石の小説『彼岸過迄』の一節である。「僕」と従妹の田口千代子は、幼いうちに「僕」の母が将来の結婚を申し入れた間柄である。父の死後、母は「僕」と千代子との結婚を強く望むが、「僕」は積極的に千代子を求めようとしない。以下の文章は、田口家の別荘を「僕」と母が訪れた場面である。これを読んで、後の問い(問1〜6)に答えよ。(配点 50)

田口の叔母は、高木さんですといつて丁寧(ていねい)にその男を僕に紹介した。彼は見るからに肉の緊(し)まった血色のいい青年であった。年からいうと、あるいは僕より上かもしれないと思つたが、そのきびきびした顔つきを形容するには、是非とも青年という文字が必要になつたくらい彼は生氣(せいけい)に充ちていた。僕はこの男を始めて見た時、これは自然が反対を比較(ひかく)するために、わざと二人を同じ座敷に並べて見せるのではなからうかと疑(うた)つた。無論その不利益(ふりやく)な方面を代表するのが僕なのだから、こう改まつて引き合(ひきあ)わされるのが、僕にはただ悪い洒落(しやれ)としか受け取られなかつた。

二人の容貌(ようぼう)が既に意地のよくない対照(たいしょう)を与えた。しかし様子とかか応対(おうたい)ぶりとかになると僕は更に甚(こ)だしい相違(さいちがひ)を自覚(じかく)しない訳(わけ)にいかなかつた。僕の前にいるものは、母とか叔母とか従妹とか、皆親(みな)しみの深い血族(けつぞく)ばかりであるのに、それらに取り巻(ま)かれている僕が、この高木に比べると、かえつてどこからか客(きやく)にでも来たように見えたくらい、彼は自由に遠慮(えんりょ)なく、しかもある程度(ていど)の品格(びんかく)を落とす危険(きけん)なしに己(みづか)を取り扱(あつか)う術(すべ)を心得(こころえ)ていたのである。知らない人を怖(おそ)れる僕にいわせると、**A** この男は生まれるや否(いな)や交際(こうさい)場(ば)裏(うら)に棄(す)てられて、そのまま今日(けふ)まで同じ所(ところ)で人(ひと)となつたのだと評(ひら)したかつた。彼は十分(じゅうぶん)と経(た)たないうちに、凡(すべ)ての会話(かいわ)を僕の手(て)から奪(うば)つた。そうしてそれを悉(ことごと)く一身(いっしん)に集(あ)めてしまつた。その代(た)わり僕(ぼく)を除(の)け物(もの)にしないための注意(ちゅうい)を払(は)つて、ときどき僕(ぼく)に一句(いちご)か二句(にご)の言葉(ことば)を与(たま)へた。それがまた生憎(あいにく)僕(ぼく)には興味(きょうみ)の乗(の)らない話題(わだかま)ばかりなので、僕はみんなを相手にする事も出来(こ)ず、高木(たかぎ)一人(ひとり)を相手にする訳(わけ)にもいかなかつた。彼は田口(たぐち)の叔母(おば)を親(お)しげにお母(お)さんお母(お)さんと呼(よ)んだ。千代子(ちよこ)に対しては、僕(ぼく)と同じように、千代(ちよ)ちゃんという幼(お)馴染(なじ)みに用(もち)いる名(な)を、自然(しぜん)に命(めい)ぜられたかのごとく使(つか)つた。そうして僕(ぼく)に、先(ま)ほどお着(き)ぎになつた時は、ちよ(ちよ)ちゃんとお貴方(あなた)のお噂(うわさ)をしていたところでしたといつた。

僕は初めて彼の容貌を見た時から既に羨ましかった。話をするところを聞いて、すぐ及ばないと思った。それだけでもこの場合に僕を不愉快にするには充分だったかもしれない。けれどもだんだん彼を観察しているうちに、彼は自分の得意な点を、劣者の僕に見せつけるような態度で、誇り顔に發揮するのはなかるうかという疑いが起こった。その時僕は急に彼を憎み出した。そうして僕の口を利くべき機会が廻つて来てもわざと沈黙を守った。

落ちついた今の気分でその時の事を回顧してみると、こう解釈したのはあるいは僕の僻みだったかも知れない。僕はよく人を疑る代わりに、疑る自分も同時に疑わずにはいられない性質だから、結局他に話をする時にもどつちと判然としたところがいいにくくなるが、もしそれが本当に僕の僻み根性だとすれば、その裏面にはまだ凝結した形にならない嫉妬が潜んでいたのである。

僕は男として嫉妬の強い方が弱い方が自分にもよく解らない。競争者のない一人息子としてむしろ大事に育てられた僕は、少なくとも家庭のうちで嫉妬を起こす機会をもたなかった。小学や中学は自分より成績のいい生徒が幸いにしてそうなかったためか、至極太平に通り抜けたように思う。高等学校から大学へかけては、席次にさほど重きを置かないのが、一般の習慣であった上、年ごとに自分を高く見積もる見識というものが加わつて来るので、点数の多少は大した苦にならなかつた。これらを外にして、僕はまだ痛切な恋に落ちた経験がない。一人の女を二人で争つた覚えはなおさらない。自白すると僕は若い女殊に美しい若い女に対しては、普通以上に精密な注意を払い得る男なのである。往來を歩いて綺麗な顔と綺麗な着物を見ると、雲間から明らかな日が射した時のように晴れやかな心持ちになる。たまにはその所有者になつてみたいという考えも起こる。しかしその顔とその着物がどうかなく変化し得るかをすぐ予想して、酔いが去つて急にぞつとする人の浅ましさを覚える。

B

僕をして執念

(注2)

く美しい人に附纏わらせないものは、まさにこの酒に棄てられた淋しみの障害に過ぎない。僕はこの気分に乗り移られるたびに、若い自分が突然老人か坊主に変つたのではあるまいかと思つて、非常な不愉快に陥る。が、あるいはそれがために恋の嫉妬というものを知らずに済ます事が出来たかもしれない。

僕は普通の人間でありたいという希望をもっているから、嫉妬心のないのを自慢にたくも何ともないけれども、今話したような訳で、眼の当たりにこの高木という男を見るまでは、そういう名の付く感情に強くなるを奪われた試しがなかったのである。僕はその時高木から受けた名状し難い不快を明らかに覚えていた。そうして自分の所有でもない、また所有にする気もない千代子が原因で、この嫉妬心が燃え出したのだと思つた時、^C僕はどうしても僕の嫉妬心を抑え付けなければ自分の人格に対して申し訳がないような気がした。僕は存在の権利を失つた嫉妬心を抱いて、誰にも見えない腹の中で苦悶し始めた。幸い千代子と百代子が日が薄くなつたから海へ行くといひ出したので、高木が必ず彼らについて行くに違ひないと思つた僕は、早くあとに一人残りたいと願つた。彼らは果たして高木を誘つた。ところが意外にも彼は何とか言ひ訳を拵えて容易に立とうとしなかつた。僕はそれと僕に対する遠慮、たろうと推察して、ますます眉を暗くした。彼らは次に僕を誘つた。僕はもとより応じなかつた。高木の面前から一刻も早く逃れる機会は、与えられないでも手を出して奪いたいくらいに思つていたのだが、今の気分では二人と浜辺まで行く努力が既に厭であつた。母は失望したような顔をして、いつしよに行つておいでなといつた。僕は黙つて遠くの海の上を眺めていた。姉妹は笑いながら立ち上がった。

「相変わらず偏屈ね貴方は。まるで腕白小僧みたいだわ」

千代子にこう罵られた僕は、實際誰の目にも立派な腕白小僧として見えたろう。僕自身も腕白小僧らしい思いをした。調子のいい高木は縁側へ出て、二人のために菅笠のように大きな麦藁帽を取つてやつて、行つていらつしやいと挨拶をした。

二人の後ろ姿が別荘の門を出た後で、高木はなおしばらく年寄りを相手に話していた。こゝやつて避暑に來ていると氣楽でいいが、どうして日を送るかが大問題になつてかえつて苦痛になるなどと、實際活気に充ちた身体を暑さと退屈さに持ち扱つていふふうに見えた。やがて、これから晩まで何をして暮らそうかしらと独り言のようについて、不意に思い出したごとく、玉ほどうですと僕に聞いた。幸いにして僕は生まれてからまだ玉突きという遊戯を試みた事がなかつたのですぐ断つた。高木はちよつどいい相手が出来たと思つたのに残念だといひながら帰つて行つた。僕は活発に動く彼の後ろ影を見送つて、彼はこれから姉妹のいる浜辺の方へ行くに違ひないといひ気がした。けれども僕は坐つて居る席を動かさなかつた。

高木の去った後、母と叔母は少時彼の噂をした。初対面の人だけに母の印象は殊に深かったように見えた。(ウ) 気の置けない、いたって行き届いた人らしいといつて賞めていた。叔母はまた母の批評をいちいち実例に照らして確かめるふうに見えた。この時僕は高木について知り得た極めて乏しい知識のほとんど全部を訂正しなければならぬ事を発見した。僕が百代子から聞いたのでは、亜米利加婦りという話であった彼は、叔母の語るところによると、そうではなくて全く英吉利で教育された男であった。叔母は英国流の紳士という言葉を誰かから聞いたと見えて、二、三度それを使って、何の心得もない母を驚かしたのみか、だからどこもなく品の善い所があるんですよと母に説明して聞かせたりした。母はただへえと感心するのみであった。

二人がこんな話をしている内、僕はほとんど一口も口を利かなかつた。ただ上辺から見えて平生の調子と何の変わる所もない母が、この際高木と僕を比較して、腹の中でどう思っているだろうと考えると、僕は母に対して気の毒でもありまた恨めしくもあつた。同じ母が、千代子対僕という古い関係を一方に置いて、さらに千代子対高木という新しい関係を一方に想像するならば、果たしてどんな心持ちになるだろうと思つたと、仮令少しの不安でも、避け得られるところをわざと与えるために彼女を連れ出したも同じ事になるので、僕はただでさえ不愉快な上に、年寄りに済まないという苦痛をもう一つ重ねた。

前後の様相から推すだけで、実際には事実となつて現れて来なかつたから何ともいいかねるが、叔母はこの場合を利用して、もし縁があつたら千代子を高木に遣つつもりでいるくらいの打ち明け話を、僕ら母子に向つて、相談とも宣告とも片付かない形式の下に、する氣だつたかもしれない。凡てに氣が付くくせに、こうなるとかえつて僕よりも迂遠い母はどうだか、僕はその場で叔母の口から、僕と千代子と永久に手を別つべき談判の第一節を予期していたのである。幸か不幸か、叔母がまだ何もいい出さないうちに、姉妹は浜から広い麦藁帽の縁をひらひらさして歸つて来た。D 僕が僕の占いの的中しなかつたのを、母のために喜んだのは事実である。同時に同じ出来事が僕を焦躁しがらせたのも嘘ではない。

夕方になつて、僕は姉妹とともに東京から来るはずの叔父を停車場に迎えるべく母に命ぜられて家を出た。彼らは揃いの浴衣を着て白い足袋を穿いていた。それを後ろから見送つた彼らの母の眼に彼らがいかなる誇りとして映じたらう。千代子と並んで歩く僕の姿がまた僕の母には画として普通以上にどんなに価が高かつたらう。僕は母を欺く材料に自然から使われる自分を心苦しく思つて、門を出る時振り返つて見たら、母も叔母もまだこつちを見ていた。

(注) 1 席次——成績の順位。

2 附纏わらせない——「附纏わる」は「つきまとう」に同じ。

3 持ち扱っている——取り扱いに困って、もてあましている。

4 玉——ここでは「玉突き」を略して言っている。玉突きは、ビリヤードのこと。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選

べ。解答番号は

12

く

14

。

(ア) 名状し難い

12

- ① 言い当てるのが難しい
- ② 名付けることが不可能な
- ③ 意味を明らかにできない
- ④ 何とも言い表しようのない
- ⑤ 全く味わったことのない

(イ) 眉を暗くした

13

- ① 迷惑に思い顔をしかめた
- ② 心配に思い顔をゆがめた
- ③ 不審に思い顔を変えた
- ④ 不愉快に思い表情をくもらせた
- ⑤ 不安に思い表情をこわばらせた

(ウ) 気の置けない

14

- ① 気分を害さず対応できる
- ② 遠慮しないで気楽につきあえる
- ③ 落ち着いた気持ちで親しめる
- ④ 気を遣ってくつろぐことのない
- ⑤ 注意をめぐらし気配りのある

問2

傍線部A「この男は生まれるや否や交際場裏に棄てられて、そのまま今日まで同じ所で人となつたのだと評したかった」とあるが、そのように高木を評する「僕」の思いを説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

15。

- ① 初対面の人にも全くものおじせず、家族のように親しげに周囲の人の名を呼ぶので、羨ましく思っている。
- ② 明るく話し上手で人づきあいに長けて^たいるうえ、そつのない態度で会話を支配するので、不快に思っている。
- ③ 周囲のすべての人に配慮しつつも、その態度はおしつけがましいものでもあるので、うつとうしく思っている。
- ④ 品格もあり容貌も立派な人物だが、完全無欠な態度によつて「僕」の居場所を脅かすので、憎らしく思っている。
- ⑤ 洋行帰りという経歴の持ち主であり、自分をよく見せる作為的な振る舞いをするので、面白くなく思っている。

問4 傍線部C「僕はどうしても僕の嫉妬心を抑え付けなければ自分の人格に対して申し訳がないような気がした」とあるが、な

ぜ「僕」はこのような気持ちになったのか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番

号は 17。

① 「僕」は常々普通の人間でいたいという希望を持っていたため、人並みに嫉妬心を持っていても不思議ではないと考えていた。千代子に高木と比較されたという思いによって生じた「僕」の僻み根性が、そうした感情と結びついてしまったことにやりきれなさを覚えたから。

② 「僕」は高木の登場によって、これまでの自己認識を超えるような嫉妬心を抱いた。高木への僻み根性に根ざしたその感情は、恋人と意識したこともない千代子を介して生じたものであり、そうした感情を制御しない限り、自分を卑しめることになるような気がしたから。

③ 「僕」は今まで本当に女性を愛した経験はなかったが、ライバルである高木の存在によって初めて千代子を愛しているのではないかと考えはじめた。高木に対する嫉妬心を消し去らなければ、千代子と純粋な気持ちで恋愛はできないと気づいたから。

④ 「僕」は一人息子として生まれたうえ、学校にも競争者がいなかったため、嫉妬心を抱く環境になかった。千代子を恋人として扱う高木に萌し始めた嫉妬心は、経験したことのない感情であり、そうした感情によって動揺する自分を浅ましいものと判断したから。

⑤ 「僕」は今まで若い女性に対してあまりに臆病であつたために、本来は恋にかかわる嫉妬心が起こるはずはなかった。如才なく振る舞う高木によってかき立てられた、そうした嫉妬の感情が自分の自制心を失わせることに気づいて羞恥を覚えたから。